

「カンムリシロムク翔び交う里」を目指す  
インドネシア・バリ島西部の地元住民・行政・企業の  
協働による、自然と経済の共生した地域づくり

## 2017 年度活動記録

(平成 29 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金助成)



2018 年 4 月

一般社団法人あいあいネット

〒231-0003

横浜市中区北仲通 3-33 関内フューチャーセンター内

## プリンピンサリ村ならびにラブハン・ラランにおけるカンムリシロムク放鳥活動

2017 年 11 月 15 日（水）

プリンピンサリ村、ラブハン・ララン

出席者：西バリ国立公園所長（アグス）、総務課長（ウィルヤワン）、第1 地域、第2 地域、第3 地域管理地域課長、公園職員、あいあいネット（エリス）

活動：

### (1) プリンピンサリ村におけるカンムリシロムクの放鳥

・カンムリシロムクの調達費用は、プリンピンサリ村の予算で賄われた。2017 年 6 月から西バリ国立公園のファシリテーターがプリンピンサリ村（特に村長）に寄り添い、カンムリシロムクの順応ケージ製作について話し合い、村の予算で製作が行われ、3 つがいのカンムリシロムクが順応ケージに入れられた。3 つがいのうち、1 つがいは西バリ国立公園から贈呈され、2 つがいは中ジャワの繁殖家から購入した。

・当初 10 月の放鳥を予定していたが、準備されたカンムリシロムクは、放鳥するには未成熟であったため、しばらく通常のケージで飼育をすることとなり、プリンピンサリ村の住民は中ジャワの繁殖家から購入したカンムリシロムクを飼育する繁殖家グループを結成した。繁殖家グループが正式にカンムリシロムクの飼育を行うためには、予めケージを製作、準備することが義務付けられ、公園のファシリテーターはグループの結成とそれに係る法的手続（繁殖許可）からケージ製作に至るまで常に繁殖家グループに寄り添い続けた。

・2017 年 9 月、各グループのケージ製作と法的手続が終了し、幼鳥も含め全部で 6 羽のカンムリシロムクがケージに入れられた。

・2017 年 11 月 15 日（水）環境林業省、ジュンブラナ県知事、ムラヤ郡長、西バリ国立公園所長、住民達が参加し、4 羽のカンムリシロムクを放鳥。

・村で放鳥されたカンムリシロムクの保全に資するべく、村条例が制定され、村のあちこちに注意喚起の看板が設置された。

### (2) ラブハン・ラランにおけるカンムリシロムクの放鳥

・2016 年 2 月に同地で放鳥が行われ全部で 10 羽のカンムリシロムクが放鳥された。

・野生下の生息数が増加したことで、ムンジャンガン島に渡る観光客もラブハン・ラランの空を翔び交うカンムリシロムクを眺めることができるようになった。カンムリシロムクのモニタリングに係るパトロールも今では公園スタッフのみならず、観光に携わる者たちも参加するようになった。



ブリンビンサリ村の繁殖ケージ



ブリンビンサリ村での放鳥式



ラブハンランでの放鳥式

## 生息環境の再生

2017 年 4 月～12 月

スンプルクランボック村、ブリンビンサリ村、ラブハンランにて、西バリ国立公園の職員と住民が森とカンムリシロムクを守るために共同パトロールを行っている。



## ギリマヌク観光振興におけるジュンブラナ県、ギリマヌク村、ムラヤ村と西バリ国立公園の協働について

2017年9月19日（火）

出席者：ジュンブラナ県観光局、ギリマヌク村 村長、ムラヤ郡長、住民グループ代表、西バリ国立公園（アリ、ナナ、スギ）、あいあいネット（エリス、ドラ）

議題：ギリマヌク観光振興における協働・合意形成

内容：ギリマヌク観光振興に係る協議・質疑応答

成果：関係機関各々が相互に作用し合い、ギリマヌクの観光振興を図るために協働することを合意。また、ギリマヌクに観光振興を支えるためにギリマヌクの住民グループをひとつにする場として機能する、観光フォーラム（ギリマヌク住民グループから成る）を設立することが決まった。



## ギリマヌク・コミュニケーションフォーラムの設立

2017年10月25日（水）

出席者：ギリマヌク住民グループ代表、西バリ国立公園（アリ、ナナ、ユディ）、あいあいネット（ドラ）

議題：2017年9月19日に行われたギリマヌク村役場での会合を受けた、ギリマヌク・コミュニケーションフォーラムの設立

内容：

- ・ギリマヌク住民グループはホストとなる準備ができているか？について話し合う
- ・住民たちは、協力したいと考えているので、「場」が必要
- ・住民たちは、グループが互いに作用し合えるようにフォーラム設立に主体的である
- ・ユディはプリンピンサリ村の住民に寄り添う活動をした経験を伝えた（観光客は、伝統工芸品づくりなどのプロセスを見ることをより好む）。

成果：

会合には15のギリマヌクの住民グループの代表が出席。ギリマヌク・コミュニケーションフォーラムの設立に合意した。フォーラムの役員選挙も同時に行われ、イマム・シャフィー



氏が代表に選ばれた。出席した主なグループは、

- ・KUBE（共同事業グループ）：イカン・スガル、スガラ・ムルタ
- ・ブルン・マンディリ
- ・観光・住民グループ、観光振興グループ、住民警備グループ 等であった。

フォーラムの役員は次の通り。

- ・代表：イマム ・書記官：カデ ・会計：ユリ
- ・観光分野責任者：アグン ・ゴミ分野責任者：イスマイル ・魚分野責任者：アンワル
- ・鳥分野責任者：イクロム



## 2018 年度観光振興インフラ整備についてのワークショップ

2018 年 1 月 31 日（水）

出席者：ジュンブラナ県観光局、ブレレン県観光局、ジュンブラナ県公共事業・空間計画局、ジュンブラナ県環境局、ブレレン県環境局、ムラヤ郡、グロガ郡、ギリマヌク村、プリンビンサリ村、スンプルクランボック村、プジャラカン村、トゥリンバワン・スワスマタ・スジャティ株式会社（自然観光業者）、ディスティ・クマラ・ナハリ株式会社（自然観光業者）、プジャラカン慣習村、ギリマヌク・コミュニケーションフォーラム、カランセウ漁民グループ（ギリマヌク）、スガラ・ムルタ漁民グループ（ギリマヌク）、ワナ・レスタリディ・ギリマヌク（共同事業グループ）、ワナ・アスリごみグループ（ギリマヌク）、ギリマヌク観光振興グループ、トゥルック・アスリ漁民グループ（ギリマヌク）、住民警備グループ（ギリマヌク）、ラブハン・ララン管理団体（スンプルクランボック）、ラブハン・ララン 観光ガイドフォーラム、ラブハン・ララン 観光サービス業コミュニティフォーラム、NGOピラン、NGOセカ、あいあいネット、取材関係者 を代表する 35 名

内容：

- ・2018 年度 西バリ国立公園 自然観光インフラ整備は、次の 3 カ所で実施する計画
- 1) カランセウ：監視塔、栈橋、警備詰め所、マングローブトレイル、ジョギングコース（歩道）、ランドマーク、シェルター、有刺鉄線
- 2) ラブハン・ララン：コタル〜ブルンブンに清浄水の供給施設、礼拝堂、トイレ

3) ムンジャンガン島：歩道、舗装、シェルター、礼拝堂、雨水貯蔵槽、トイレ、清浄水の供給施設

- ・協議の中で出された意見

- あらゆる建造物を“バリ”スタイルに（形状・材料）
- テーマ性のある建造を行い、西バリ国立公園の大きなテーマとつながりをもたせ、ランドマークを維持する

- ラブハン・ラランのブレレン県所有の建造物が壊れているので、その修復に国立公園が協力する

- 総合的なゴミ管理システムの構築を図る

- ゴミ管理について住民の意識転換を図り、オーナーシップの醸成のため住民を巻き込む

- 西バリ国立公園のポテンシャルは自然と文化にあるので、文化の伝承と自然保全の融合と住民の福祉を第一義にすることが望まれる

- 地方開発計画局(Bappeda)と自然観光インフラ整備計画について調整をする 等

- ・パブリック・コンサルテーションの提言

1. 西バリ国立公園管理のテーマは、「生物多様性」である

2. 西バリ国立公園の自然観光インフラ整備においては、バリスタイルを重んずる



ブジャラカン村の観光グループによる宿泊施設



スンプルクランボック村のトレッキングガイド



ムラヤ村のカンムリシロムク繁殖家への指導



国立公園職員と話し合うあいあいネットメンバー





ギリマヌク村のマングローブ林近くのゴミ箱設置



同村漁民グループによる養殖いけす

## ギリマヌクの住民グループがラブハン・ラランを訪問

2018年1月～2月

ギリマヌク・コミュニケーションフォーラムがラブハン・ララン観光サービスフォーラムを訪問し、ラブハン・ラランとバニユウェダンにおける観光管理とツアーガイドの活動を視察した。



## ワナ・アスリごみグループとギリマヌク村役場の環境責任者がギリマヌク ゴミステーションのゴミ管理について話し合いを行った

2017年10月～2018年2月

成果：

- ・各家庭でゴミの分別を始めるように周知活動をする
- ・ゴミ管理についての規則を発出するよう、ギリマヌク村幹部に働きかける
- ・コンポスト実施の候補地についての協議

- ・ゴミステーションと人家との間に塀を作ること
- ・カランセウで火力発電所、西バリ国立公園、スガラ・ムルタグループ、カランセウ漁民グループ、共同事業グループアルム・ジャヤ、ワナ・レスタリグループで共同清掃活動を行う等

## 環境教育活動

2018年1月～2月 於：ギリマヌク村

西バリ国立公園第1地域管理課の職員がギリマヌク イスラム学校側と何度か会合をもち、環境教育を行うことを話し合った。教材としてゴミ管理に関するものがあり、子ども達がゴミにはどんな種類があるのか、ゴミ捨て場に捨てる前にどのようにゴミを分別すればよいのかを知ることができるように組み立てられている。はじめの一歩として、公園職員が児童と一緒にカランセウでのごみ拾いを行った。



2018年2月23日 於：スンプルクランボック村

西バリ国立公園第2地域管理課の職員がスンプルクランボック村の青年団と会合をもった。その中で、植樹と養蜂によってカンムリシロムクの生息環境再生を図ることが伝えられた。





## ギリマヌク村での協働クリーンアップ活動

2017 年 10 月～2018 年 3 月にかけて毎月、「ゴミのないギリマヌク」を目指して、海岸や道路沿いのクリーンアップ活動を、多様な主体の協働によって実施している。参加者は同村の住民グループ、行政関係者、企業、子どもたち、ヒンドゥー教の寺院関係者、そしてボランティアである。



## 専門家活動報告

専門家氏名：長畑 誠

(一般社団法人あいあいネット代表理事／明治大学ガバナンス研究科教授)

活動日程：2017年8月29日～31日（渡航期間は8月28日～9月1日）

活動場所：インドネシア・西部バリ国立公園内および周辺村

活動目的：

『カンムリシロムク翔び交う里』を目指すインドネシア・バリ島西部の地元住民・行政・企業の協働による、自然と経済の共生した地域づくり」プロジェクトの活動現場において、多様な主体による協働を通じた自然環境保全と地域振興に取り組む村のグループと、それをファシリテートする西部バリ国立公園職員を訪ね、活動のモニタリングを行うとともに、円滑な活動の進展や今後の発展に向けた、必要な助言・指導を行う。

活動内容：

### 【1日目】

- ① ギリマヌク村訪問：同村担当のナナ・ルクマナ氏およびクアット・ワユディ氏とともに、漁民グループによる新しい活動（魚の養殖）を視察。さらに村役場のイニシアティブで同村のガス火力発電所の支援も受けて、住民主体のゴミ処理活動を進める集積所を訪れる。ギリマヌク村は複数の住民グループがバラバラに活動しているので、今後は観光振興を軸に村役場と公園事務所とが協働して、住民グループとのフォーラムを形成する方向性について協議し、助言した。
- ② ムラヤ村訪問：カンムリシロムクの飼育下繁殖を始めた住民を訪問。既に5羽が生まれたとのこと。このほかに、今年になって始まったコオロギ繁殖のグループ（鳥の餌として）が順調に進んでいることも確認。ただ、これらはまだ個人の動きなので、住民グループの発展可能性について、担当のナナ氏らと話し合う。同村のクラタカン集落に呼ばれているので、今後はそちらの住民グループへのファシリテーションも行うことを確認。なお、エカサリ村でもカンムリシロムクの繁殖が開始されたとのこと（個人ベース）。
- ③ ブリンビンサリ村：村長と面談。既に村役場では、自然環境保全に関する条例を制定し、カンムリシロムクの飼育下繁殖も進めている。今年末か来年初めには初めての放鳥を行う予定とのこと。放鳥後のモニタリングを住民主体で行うことと、小学校で環境教育を進めることについて、村長および担当スタッフと協議した。

## 【2 日目】

- ① 国立公園第二セクションの事務所を訪問。第二セクション課長やスタッフと協議。スンブル克蘭ボック村の住民グループ（カンムリシロムク繁殖家グループ）の現況について共有した。スンブル克蘭ボックの村長はカンムリシロムクの放鳥を計画しているが、まだ具体化していないとのこと。
- ② スンブル克蘭ボック村で活動する元違法伐採者によるトレッキングガイドグループを訪問。ナナ・ルクマナ氏とスギアルト氏が同行。ちょうど外国人の旅行客がガイド詰所を訪れ、森の説明を受けていた。1 週間に何件かの観光客が来るが、昨年よりは減っているとのこと。スンブル克蘭ボック村全体としての魅力発信を強めることが必要だろう。
- ③ スンブル克蘭ボック村の漁民グループが活動している **Teluk Terima** の海岸を訪問。担当の公園スタッフであるングラ（**Ngurah**）氏の話聞く。漁民グループは海岸の整備を開始し、国立公園事務所にダイビング客の誘致やマングローブ林観光の許可を含むプロポーザルを提出したとのこと。しかし計画が未熟であることから、ペンディングになっている。海岸はゴミが散乱し、漁師が網を広げ、牛が草を食んでいる状況であり、ダイビング目当ての観光客をひきつけることはできそうにない。むしろ、村の暮らしを見てもらう、村にあるものを活用した観光という方向性を考えたかどうか、という助言をした。
- ④ プジャラカン村で、海岸に宿泊施設を建設して運営している住民グループがあるとのことで、訪問。60 人の村人が最初 100 万ルピア（約 8 千円）ずつを拠出して結成。まず砂浜の整備と食堂の建設から始め、いまは 9 部屋のビラを運営している。外からの援助は一切なしとのこと。今後の国立公園との協働可能性について話をした。

## 【3 日目】

- ① 国立公園事務所にて、プロジェクトチームのリーダーらと協議。総務課長のウィルヤワン氏、森林生態系管理官のナナ・ルクマナ氏と同スギアルト氏。あいあいネット現地スタッフのエリザベス同席。国立公園の活動域の中では、第一セクションのあるプリンビンサリ村とギリマヌク村が先行している。両村とも村役場のイニシアティブと、関係団体および住民による参加型のフォーラムが出来ており、そこを軸に村落観光を進めていく方向性がある。そこで、この 2 つの村を先行事例として、他の村へ波及させていく戦略を話し合った。特にカンムリシロムクを公園周辺地域全体の共通のアイコンとして、飼育下繁殖だけでなく、放鳥と野生復帰を進めていく重要性を確認した。また、公園内で唯一のダイビングスポットであるムンジャンガン島には最近、多くの観光業者が自前でダイビング客を運ぶようになっており、過剰な利用となる危険性がある。観光客の訪問先を多様化す



るためにも、カンムリシロムクの野生復帰に伴うさまざまな観光資源の開発の必要性が確認された。

- ② 現地調整スタッフ・エリザベスとの協議：国立公園事務所のプロジェクトチームは、多様な関係者を巻き込んだ協働を進めるために、あいあいネットの助言を必要としている。また、カンムリシロムクの野生復帰や、それに伴う関係者の協働についても、今後も引き続きあいあいネットからの支援が期待されている。第1セクションを先行事例としつつ、カンムリシロムクの生息域に隣接しているスンプルクランポックのある第2地域およびダイビングスポットへの渡航拠点のある第3地域へも必要に応じて助言していくことを確認した。また、これまでの活動内容についての報告作成についても確認した。

#### 【活動の写真】



ギリマヌク村にてナナ氏、エリザベス氏と



同村のゴミ集積場にて



ムラヤ村の個人繁殖家宅にて



ブリンビンサリ村役場で村長と





スンプルクランポック村トレッキングガイド



ングラ氏との話し合い



Teluk Terima の海岸



プジャラカン村の住民グループによるビラ



国立公園事務所での協議



ブリンビンサリ村のカムリシロムク

## 専門家活動報告

### 1. 専門家氏名：山田 理恵

(一般社団法人あいあいネット理事)

活動日程：2017 年 10 月 30 日～11 月 3 日（渡航期間は 10 月 29 日～11 月 4 日）

活動場所：インドネシア・西部バリ国立公園内および周辺村

活動目的：

『カンムリシロムク翔び交う里』を目指すインドネシア・バリ島西部の地元住民・行政・企業の協働による、自然と経済の共生した地域づくり」プロジェクトの現場において、カンムリシロムクの飼育下繁殖や生息地保全ならびに将来の放鳥に向けて活動する住民グループを訪ね、事業を担当する西部バリ国立公園職員と進捗について確認し、円滑な活動の進展や今後の発展に向けた、必要な助言・指導を行う。

活動内容：

#### 【1 日目】10 月 30 日

ジャカルタからスラバヤ、バニユワングを経由して、フェリーでバリ島へ入り、西部バリ国立公園に 17 時到着。新任のアグス・クリスナ公園所長と面会し、これまでの活動進捗についてシェアするとともに、今回の活動計画を共有する。新所長は以前第三地域課長として西部バリ国立公園に赴任していた当時、ちょうどあいあいネットによるファシリテーター育成活動が始まったばかりだったが、その成果を目にすることなく他の国立公園へ異動していた。その後、公園職員による村へのファシリテーションは徐々に効果を出し始め、今では多くの村で住民のイニシアティブによる自然と共生した生計向上活動が始まっていることを今回赴任してきて初めて知り、大変感銘を受けたとのこと。今後はカンムリシロムクの野生復帰を周辺村で多様な関係者と協働して進め、それをテコに観光の振興を地域全体として図っていく方向性を公園事務所としても考えており、あいあいネットと今後も協力していくことを確認した。

#### 【2 日目】(10 月 31 日)

- ⑤ 公園職員でプロジェクトメンバーのスギアルト氏とともに、スンプルクランポック村のスガラ寺院周辺を訪れる。ここはラブハンランで放鳥したカンムリシロムクが毎日のように飛んでくる場所。この日も 10 羽ほどを確認できた。村の人家にも近く、果樹園の果物をついばみにやってくるとのこと。村人の関心が少しずつ高まっているようだ。ちょうど観光客が 1 名、バードウォッチングに来ていた。



- ⑥ ラブハンラランの放鳥拠点を訪問。モニタリングを担当していた公園職員でプロジェクトメンバーのジャルマン氏と話す。この地域での放鳥数を確認。またパトロールやモニタリングの頻度についても話を聴く。この地域でも住民のカンムリシロムクへの関心が高まりつつあり、2～3週間に一度、住民も参加してモニタリング活動を行っているとのこと。ただ、ジャルマン氏自身は担当が代わってしまったため、以前のように住民と話す時間がとれないのが悩み。
- ⑦ 一日遅れで日本からやってくる専門家・壽賀一仁氏を迎えにフェリーで対岸の町バニユワンギへ渡り、空港で出迎え。その後、住民が中心となって伝統的な村の文化を魅力に観光に取り組むオシン族のクミレン村を訪問。村の若者の話を聴いた。

### 【3日目】(11月1日)

- ③ 朝6時から公園事務所でバードウォッチングを担当するユディ氏とともに、国立公園内でカンムリシロムクの見られる場所へ移動。リゾート施設である Pelatran のタワーから森を眺める。3羽のカンムリシロムクを確認。足環がついていないので、野生で繁殖した第二世代である。その後、プジャラカン村の住民による観光振興グループを訪問し、話を聴いた。
- ④ ムラヤ村へ移動。公園のプロジェクトチームメンバーのナナ氏も同行。村人のカンムリシロムク繁殖グループメンバー、サムシュリさんの家を訪問した。2羽(1つがい)から、既に9羽の子どもが生まれている。飼育ケージを増築中であった。ムラヤ村はカンムリシロムクの餌となるコオロギを飼育販売するグループもあり、有機的なつながりができつつあるとのこと。
- ⑤ ブリンビンサリ村へ移動。村による初めてのカンムリシロムク放鳥が11月15日に予定されているとのこと。全部で6羽の放鳥を予定。また同村の繁殖グループ・メンバーであるマデ氏のお宅も訪問。順調に繁殖が進んでいる。
- ⑥ ギリマヌク村訪問。繁殖グループが結成されたが、まだカンムリシロムクは居ない。他の鳥を飼育繁殖しているイクロム氏のお宅を訪問した。さらにゴミのリサイクルに取り組むユリさんの作業場も訪問。同村で新しく活動を始めた漁師のグループ (Segera Merta) も訪問。

### 【4日目】(11月2日)

- ① スンブルクランポック村で公園内のトレッキングガイドをする村人のグループ「Bali Starling Volunteer」を訪問。ミスナヤさんと話をする。その後、同村の繁殖グループのサイニさんの案内で村の繁殖家を訪問。ミスナヤさんによると、トレッキングに来る観光客の中でカンムリシロムクに興味を持つ人は少なくないとのこと。その人たちには、森の中で国立公園が放鳥の拠点としている Lampu

Merah へ連れていくこともあるが、村の中を案内することはないとのこと。以前はスンプルクランボック村で観光村として振興しようという機運があったが、今は少し低調とのこと。

- ② 国立公園職員でプロジェクトメンバーのグラ氏の家（スンプルクランボック村内）を訪問。氏と同村でのカンムリシロムク放鳥の計画について話を聴く。村長は 2019 年を目標に村でカンムリシロムクを放鳥する計画を持っているとのこと。しかしながら、村として生息地保全やモニタリング等に取り組んでいくのか、ランドデザインがまだ全くないようなので、その辺について今後どう進めていくかをグラ氏と協議した。
- ③ あいあいネット現地スタッフのエリザベスおよびドラと翌日の公園での全体会議の進め方について話し合いを行った。

#### 【5 日目】（11 月 3 日）

西部バリ国立公園事務所にて、プロジェクトチームのメンバーと全体会議を開催。所長および総務課長以下、13 名が参加。あいあいネット側からこの 3 日間で見聞きしたことについて報告した。ムラヤ村とブリンビンサリ村でカンムリシロムクの繁殖グループの活動が進んでいる一方で、以前から同様のグループが活動しているスンプルクランボック村での動きが鈍くなっている点が話し合われた。もう一度、同村の繁殖グループのメンバー（特にリーダー以外）とじっくり話を聴く機会を作ることが確認された。またプジャラカン村では病気で弱っているカンムリシロムクを村人が発見して国立公園に通報して、保護した、というケースがあり、村人の関心が以前より格段に高まっていることが報告された。そして総務課長からは、西部バリ国立公園の周辺村での住民主体のカンムリシロムク保護と野生復帰をテコにした観光振興が、林業省のなかでモデルケースとして取り上げられる可能性が話され、今後もこの方向性で動いていくことが確認された。

ミーティング後、フェリーでバニユワンギへ渡り、空港からジャカルタを経由して、夜行便で帰国した。

## 2. 専門家氏名：壽賀 一仁

(一般社団法人あいあいネット専務理事)

活動日程：2017 年 10 月 31 日～11 月 3 日（渡航期間は 10 月 30 日～11 月 4 日）

活動場所：インドネシア・西部バリ国立公園内および周辺村

### 活動目的：

『カンムリシロムク翔び交う里』を目指すインドネシア・バリ島西部の地元住民・行政・企業の協働による、自然と経済の共生した地域づくり」プロジェクトの現場において、多様な関係者の協働を通じた、自然と共生する観光振興について、その進捗を西部バリ国立公園職員と共有し、円滑な活動の進展や今後の発展に向けた、必要な助言・指導を行う。

### 活動内容：

#### 【1 日目】（10 月 31 日）

ジャカルタからバニユワンギへ航空機で移動し、空港で先発の山田理恵氏と合流。夕方、迎えの公園職員・スギアルト氏とともに、住民が中心となって伝統的な村の文化を魅力に観光に取り組むオシン族のクミレン村を訪問した。ここでは村の行政が住民による観光委員会の結成を促し、その委員会のもとに、複数の住民グループが観光振興のために活動している。観光委員会が設立して若者グループが運営するレストランを訪問。3 年前にできたこのレストランは、オシン族の伝統的な食事を提供しており、多くのインドネシア人観光客が訪れている。運営メンバーの若者によると、村の伝統行事はすべて若者たちが中心になって担っているとのこと。同行のスギアルト氏は、若者の多くが町へ出稼ぎに行ってしまう西バリの村と比べて、若い世代が残っているこの村に将来性を感じていた。村行政による観光振興の好例として、西部バリ国立公園周辺の村人たちが学べることが多いと考えられる。

#### 【2 日目】（11 月 1 日）

- ① 早朝、ユディ氏とともに、バードウォッチング。その後スンプルクランボック村の観光振興グループが活動をしている **Teluk Terima** 地域およびプジャラカン村の住民観光振興グループによるホテル **White Sandy Beach** を訪問。いま西部バリ地域では観光振興に向けた住民グループの結成がある意味でブームになっていることを感じた。
- ② 公園職員のナナ氏も加わって、ムラヤ村とプリンビンサリ村を訪問する。主に村人によるカンムリシロムク繁殖グループの活動を視察して話を聴く。プリンビン



サリ村では村行政が自然環境保全のための村条例を制定し、カンムリシロムクの放鳥に向けて、村の多様なグループや周辺企業とも協働して観光振興を進めようとしている。

- ③ 次に、以前から住民主体のゴミ問題解決に向けた動きのあるギリマヌク村を訪問。村行政とガス火力発電所および電力会社が住民と協力してゴミのリサイクルや集積場の整備を進めている。またプラスチックゴミのリサイクルに取り組む住民グループのリーダーであるユリさんの活動拠点では、家庭生ごみの堆肥化に取り組んでいた。ゴミの問題は多様な関係者が絡んでいるので、協働による活動の形成が欠かせないと考えられる。
- ④ 同じギリマヌク村のギリマヌク湾では、漁民グループが新たに魚の養殖に取り組み始めている。今年8月に始めていまでは海上の生け簀が9個に増えている。今は稚魚を（公園の許可を得て）マングローブから採取しているが、今後は自力で繁殖にも取り組んでいく予定とのこと。ここでも公園と住民の協働が一つの鍵になっている。担当のナナ氏は住民たちをしっかりと見守っている。

### 【3日目】（11月2日）

- ① スンブル克蘭ボック村のガイドグループ「Bali Starling Volunteer」のメンバーであるミスナヤさんと、同村の繁殖グループのサイニさんの案内でスンブル克蘭ボック村の中を歩く。家畜と果樹が主要な収入源だが、猿に食べられる害が頻発するようになり、果樹ではなく材木になる木を植えるようになっているとのこと。今後の村の観光資源としては、村人の普通の暮らしや風景を見てもらい、そこにカンムリシロムクが飛び交う姿があれば、アピールする力があるのではないか。
- ② 国立公園職員でプロジェクトメンバーのグラ氏の家（スンブル克蘭ボック村内）で、氏と話をする。スンブル克蘭ボック村は広範囲で関係者も多いため、国立公園側の態勢をしっかりと整備しないと対応しきれない、ということを氏と共有した。あいあいネット現地スタッフのエリザベスおよびドラと翌日の公園での全体会議の進め方について話し合いを行った。

### 【4日目】（11月3日）

西部バリ国立公園事務所にて、プロジェクトチームのメンバーと全体会議を開催。所長および総務課長以下、13名が参加。あいあいネット側からこの3日間で見聞きしたことについて報告して、意見交換を行った。ナナ氏によると、ギリマヌク村では数多くのグループがバラバラに活動している状況であり、今後は全体の調整が必要とのこと。村行政もそれを考えていて、ギリマヌク観光情報共有フォーラムを結成したとのこと。15の住民グループがそこに加入している。11月15日に集まりがあり、ア

クションプラン作りを行う予定である。またプジャラカンでも複数の観光振興グループがあるので、今後は協働して動ける場（フォーラム）の形成が必要との認識で国立公園側と一致した。何人かの公園職員はコミュニティ・ファシリテーションの手法が様々な場面で役立つと実感しており、今後は多様な関係者の協働を促すファシリテーションが求められている。所長は最後のスピーチで、「西バリ式コミュニティファシリテーション（インドネシア語で **FMBB**）」を林業省で広く多くの関係者に伝えていく意向を表明した。

ミーティング後、フェリーでバニュワンギへ渡り、空港からジャカルタを経由して、夜行便で帰国した。

【活動の写真】



ムラヤ村の繁殖グループメンバー



グリーンビンサリ村役場前の放鳥前ケージ



発電所・電力会社の協力によるゴミ箱



漁民グループによる生け簀養殖



スンプルクランボック村を歩く



ングラ氏との話し合い



## 専門家活動報告

### 1. 専門家氏名：山田 理恵

(一般社団法人あいあいネット理事)

活動日程：2018年3月21日～3月23日（渡航期間は3月20日～3月25日）

活動場所：インドネシア・西部バリ国立公園内および周辺村

活動目的：

『カンムリシロムク翔び交う里』を目指すインドネシア・バリ島西部の地元住民・行政・企業の協働による、自然と経済の共生した地域づくり」プロジェクトの現場において、カンムリシロムクの飼育下繁殖や生息地保全ならびに放鳥の現状を把握し、事業を担当する西部バリ国立公園職員と話し合い、円滑な活動の進展や今後の発展に向けた、必要な助言・指導を行う。

活動内容：

#### 【1日目】3月21日

羽田を前日深夜に出発して早朝にジャカルタに着き、国内線に乗り換えてスラバヤを経由して東ジャワのバニユワンギに到着。迎いの現地スタッフ・Elizabeth と会い、事業の進捗状況や課題について話し合う。その後、フェリーでバリ島のギリマヌク港へ渡り、西部バリ国立公園には19時到着。アグス・クリスナ公園所長および総務課長のウィルヤワン氏と面会した。そこでの話し合い内容でカンムリシロムク飼育下繁殖や生息地保全等に関する点は次の通り。

- 林業省の政策として、全国の各国立公園で協働管理のロールモデルを作ることになり、西部バリ国立公園では「住民と行政等の協働によるゴミ処理」と「多様な関係者の協働によるカンムリシロムクをアイコンとした自然観光振興」の2つに取り組み始めた。
- カンムリシロムクの放鳥は国立公園によるものに加えて、2017年12月にブリンビンサリ村で初めて実施されており、今後はギリマヌク村、スンプルクランポック村でも予定されている。
- 公園事務所として、いま現在、3つの作業部会を設けている。「住民エンパワーメント」「非有機ゴミの処理」「住民主体のカンムリシロムクパッケージツアー開発」の3つがテーマ。
- 国立公園としては、2018年中にロールモデルを取りまとめる必要があり、あいあいネットにもぜひ協力してほしい。

- あいあいネットとしては、カンムリシロムクの生息地保全等に関する技術的協力に加えて、ロールモデルをまとめるための情報収集に協力する用意がある。
- インドネシアの他地域および日本において、希少種・絶滅危惧種の保護や生息地保全再生に取り組む事例から学べることも多く、2018 年度は事例訪問調査・交流の企画を進めていきたい。

## 【2 日目】（3 月 22 日）

国立公園の現場職員で当プロジェクトのコミュニティ・ファシリテーターとして活動するメンバーたちと活動の進捗状況について共有する場を持った。出席者は公園事務所のウィルヤワン総務課長、アリ第一地域課長、ヘンドラ第三地域課長、森林生態系管理官のナナ氏、ユディ氏、スギアルト氏、ヘリー氏、グラ氏、森林警護官のグストウット氏、ジャルマン氏等。あいあいネットから長畑、山田、エリザベス、ドラの 4 名。

参加者たちの主要な課題は、今年公園事務所が取り組むことになっているロールモデルについて、どう進めて行ったらいいか、であった。特にカンムリシロムクをアイコンとした自然観光振興については、次のような質疑応答・助言を行った。

- 具体的にどのような活動をすることになるか？⇒スンプルクランポック、ブリンビンサリ、ギリマヌクの 3 村で、既にある観光資源を掘り起こして、それをパッケージ化することを考えている。
- 誰がパッケージをつくるのか？⇒住民が作っていく。具体的には、各村にある住民グループの中からリーダーシップのあるメンバーが中心となる。
- 他の村は対象としないのか？⇒まず今年は 3 つの村でパイロット的に始めたい。
- 6 つの周辺村すべてを巻き込んでいく体制は？⇒来年以降の目標としている。
- プジャラカン村は住民グループによる自然観光振興（例えばマングローブ観光、ヴィラの建設等）が盛んなので、ぜひ巻き込んでほしい。
- パッケージを作った後の広報は？⇒来年以降が中心となる。
- いまは SNS の時代であり、広報も口コミによる広がりを感じ重視してほしい。その為の仕掛けも必要ではないだろうか。

## 【3 日目】（3 月 23 日）

前日の結果を受けて、あいあいネットで内部ミーティングを行った。その内容は次の通り。

- 住民との協働による自然観光振興については、インドネシア国内での事例調査と、日本の事例（佐渡、豊岡、徳之島を想定）訪問調査を 2018 年度に計

画したい。その時期としては、7～8月および2月を想定。

- 日本への訪問団は最大で4名、10日間を考えたい。人選は国立公園所長と協議して進めるが、村のリーダーも加えたい。

この日はギリマヌク村のゴミ処理関係の視察およびカンムリシロムク放鳥後のブリンビンサリ村の状況等の調査を計画していたが、山田理恵がホテルで転倒して頭を打ち、その経過が心配なため、急遽デンパサールへ移動して病院に行くことになり、現場訪問はキャンセルとなった。

デンパサールの総合病院での検査・診察の結果、大きな異常は見られないとのこと、翌24日、予定通り帰国の途につくことになった。

以上



## 2. 専門家氏名：長畑 誠

(一般社団法人あいあいネット代表理事／明治大学ガバナンス研究科教授)

活動日程：2018年3月21日～3月23日（渡航期間は3月20日～3月25日）

活動場所：インドネシア・西部バリ国立公園内および周辺村

### 活動目的：

『カンムリシロムク翔び交う里』を目指すインドネシア・バリ島西部の地元住民・行政・企業の協働による、自然と経済の共生した地域づくり」プロジェクトの活動現場において、多様な主体による協働を通じた自然環境保全と地域振興の両立した取り組みについて、それをファシリテートする西部バリ国立公園職員を訪ね、活動のモニタリングを行うとともに、円滑な活動の進展や今後の発展に向けた、必要な助言・指導を行う。

### 活動内容：

#### 【1日目】3月21日

羽田を前日深夜に出発して早朝にジャカルタに着き、国内線に乗り換えてスラバヤを経由して東ジャワのバニュワンギに到着。迎いの現地スタッフ・Elizabeth と会い、事業の進捗状況や課題について話し合う。その後、フェリーでバリ島のギリマヌク港へ渡り、西部バリ国立公園には19時到着。アグス・クリスナ公園所長および総務課長のウィルヤワン氏と面会した。そこでの話し合い内容で自然環境保全と地域振興の両立した活動に関する点は次の通り。

- 林業省の政策として、全国の各国立公園で協働管理のロールモデルを作ることになり、西部バリ国立公園では「住民と行政等の協働によるゴミ処理」と「多様な関係者の協働によるカンムリシロムクをアイコンとした自然観光振興」の2つに取り組み始めた。
- ゴミ処理については、「海からの漂着ゴミ」「住民が出すゴミ」「観光客の出すゴミ」という3つの課題があり、今現在は、住民を巻き込んだクリーンアップ活動、家庭ごみのリサイクル促進および有機ゴミの確実な回収について、ギリマヌク村で行政と住民の協働を促すファシリテーションを行っている。
- ゴミ処理とカンムリシロムク観光振興については公園職員による作業グループを結成している。
- 国立公園としては、2018年中にロールモデルを取りまとめる必要があり、あいあいネットにもぜひ協力してほしい。

- あいあいネットとしては、日本の環境省（ジャカルタの環境林業省に廃棄物処理の専門家を派遣）や自治体の専門家（例えば北九州市は長年インドネシアに協力している）に繋いで、何らかの助言を得られる方向性も考えたい。
- ロールモデル策定についても、あいあいネットの専門家（日本およびインドネシア）による協力体制を作っていきたい。

## 【2日目】（3月22日）

国立公園の現場職員で当プロジェクトのコミュニティ・ファシリテーターとして活動するメンバーたちと活動の進捗状況について共有する場を持った。出席者は公園事務所のウィルヤワン総務課長、アリ第一地域課長、ヘンドラ第三地域課長、森林生態系管理官のナナ氏、ユディ氏、スギアルト氏、ヘリー氏、グラ氏、森林警護官のグストウット氏、ジャルマン氏等。あいあいネットから長畑、山田、エリザベス、ドラの4名。

会議では、公園事務所が取り組み始めた二つのロールモデルの進め方について活発な意見交換を行った。特にゴミ処理についての話し合いでは、次のような質疑応答・助言を行った。

- 主にどの村で活動を行っているか？⇒第一にギリマヌク村。それにスンプルクランポック村に近いプラパットアグン半島の一角、そしてプジャラカン村とスンプルクランポック村の間にあるラブハンラン港の周辺である。
- 一口にゴミといっても、発生源を考えると、①海からの漂着ゴミ、②住民の出すゴミ、③観光客の出すゴミ、の3種類があり、②の住民によるゴミでも、一般の家庭からのゴミと、食堂や店舗などの事業ゴミとは性質が異なる。それぞれ、発生源の違いで対策も違ってくる。現段階で、どこにどのくらいのゴミが出ているのか、把握できているか？⇒ギリマヌク村では、住民によるゴミが多いが、ゴミの収集を通じておおよその量や比率が見えてきている。プラパットアグンではヒンドゥー教の礼拝所があるため、参拝客によるゴミが問題で、あとは漂着ゴミ。ラブハンランは観光客によるゴミが中心。
- 日本では多くの観光地で、観光客によるゴミの持ち帰りを促進している。また漂着ゴミについての対策を進めている自治体もある。こうした日本の例から学ぶことも多いだろう。
- ロールモデルの取組はどこまで進んでいるのか？⇒計画書は作成し、3か所の取組地域も決め、クリーンアップやパトロールを住民とともに開始している。ただ、具体的にゴミを減らす方策については、まだまだこれからである。

## 【3日目】（3月23日）

前日の結果を受けて、あいあいネットで内部ミーティングを行った。その内容は次

の通り。

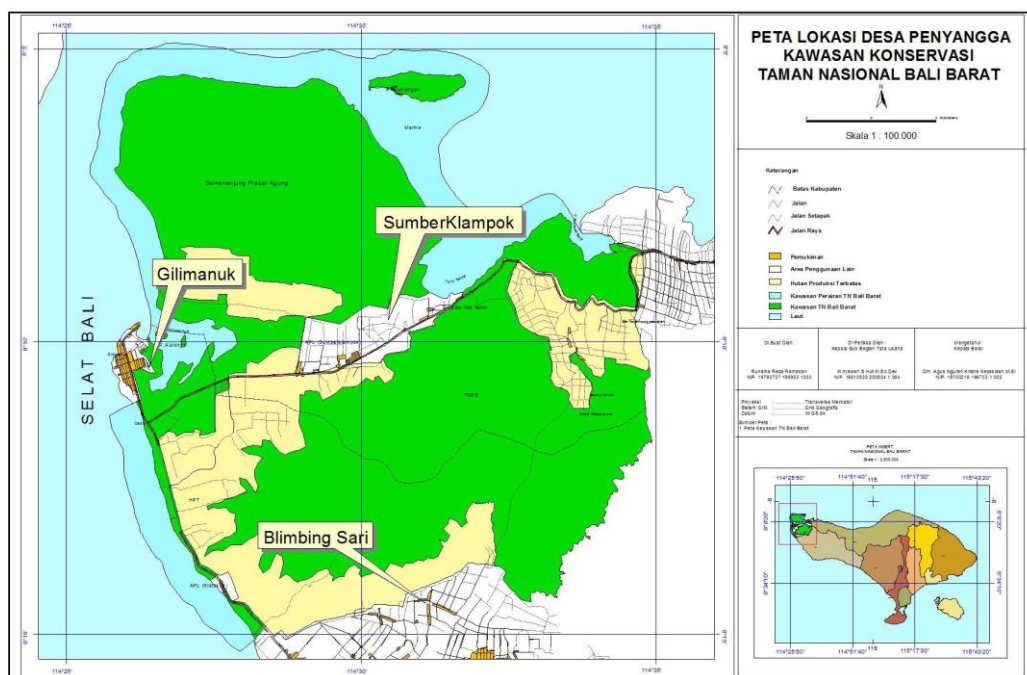
- 住民との協働による自然観光振興については、インドネシア国内での事例調査と、日本の事例（佐渡、豊岡、徳之島を想定）訪問調査を 2018 年度に計画したい。その時期としては、7～8 月および 2 月を想定。
- 日本への訪問団は最大で 4 名、10 日間を考えたい。人選は国立公園所長と協議して進めるが、村のリーダーも加えたい。
- ゴミ問題についても、日本の自治体や環境省からの情報収集を行う。
- ロールモデルの完成に向けて、あいあいネットのインドネシア人専門家 1 名（ヨハネス・ゲワ）、日本人専門家 1 名（長畑）、そして第三者でかつ西バリの状況をよく知っているインドネシア人専門家 1 名（候補：JICA の REDD +プロジェクトで働いているディコ氏）によるチームを結成し、情報収集とデータ整理・分析を通じて、モデルの文章化に協力していく。
- 西部バリ国立公園からは、モデルのプロモーションのためにビデオ制作をする希望があり、これについての協力を求められているが、まずはモデルの中身を作っていくことを優先したい。

この日はギリマヌク村のゴミ処理関係の視察およびカンムリシロムク放鳥後のプリンビンサリ村の状況等の調査を計画していたが、山田理恵がホテルで転倒して頭を打ち、その経過が心配なため、急遽デンパサールへ移動して病院に行くことになり、現場訪問はキャンセルとなった。

デンパサールの総合病院での検査・診察の結果、大きな異常は見られないとのことで、翌 24 日、報告書作成に向けての役割分担を確認した後、予定通り帰国の途についた。

以上

ロールモデル計画書による、カンムリシロムク自然観光の振興対象村



ギリマヌク村のゴミ



マングローブ林近くのゴミ

